

# 第2次地域福祉活動計画 中間報告

## 基本目標 1 地域で顔の見える関係づくり

### 活動目標 (1) 自治会区を基盤とした小地域ネットワークの拡充

- 身近な地域で福祉課題に取り組む住民が主役の組織として「小地域ネットワーク」を町内全ての自治会区での設置をめざし支援します。
- 小地域ネットワーク連絡会等を通して、活動者が情報交換し学び合うことで活動の基盤を強めていきます。

#### 2次計画による成果

- ・小ネットの活動がいろいろな場面で重要視され、地域住民が必要を感じ徐々に広がりつつある状態である。
- ・小ネットの定例会の情報共有から新たな活動へ発展している。→介護予防を取り入れた取り組み。
- ・夏休み宿題サロンを開催することにより子どもへの関心が深まり活動に繋がっている。(学校の協力や自治会の回覧板など、地域の声かけもたくさんあった)

#### 「実施計画と評価」

##### ①小地域ネットワークの組織化

	27年度	28年度	29年度	30年度
i. 住民座談会の開催	1カ所	1カ所	1カ所	2カ所
★ ii. 小地域ネットワーク組織化支援 (24地区)	11カ所 45.8%	12カ所 50.0%	13カ所 54.2%	14カ所 58.3%

(評価指数) 計画終了年次までに全地区で小地域ネットワークの組織化

(取組で見えてきた課題)

- ・小地域ネットワーク情報発信を強化して活動の周知と関心を高めていく。

#### 事例

- 気になる世帯を住民の福祉力で解決への糸口をつかむ

地域に気になるお宅があるが、以前から地域との関わりが薄い。そのお宅は塀から枝が伸び放題になっていて見通しが悪くそこを車で運転する方から苦情が出ていた。小ネットの世話人が意を決して日頃お付き合いのないお宅ではあったがサロンへのお誘いに行かれたところすんなり参加の意向。それから植木の事を話題に出し、地域住民が剪定することに同意されて地域住民との垣根が取れていった。

その後、その方も含めておひとり様が多い地域である事にも着目し、お一人様が集まれるサロンを開催。近くに住みながらお付き合いがなかった方も多かったのだが、このサロンで同じ時を過ごすことで関係を築いている最中でありお一人様同士の気にかける関係へと変わっていった。

#### 「実施計画と評価」

##### ②小地域ネットワークの充実

	27年度	28年度	29年度	30年度
i. 小地域ネットワーク連絡会の開催	月1回開催	月1回開催		
ii. 各地域の中で見えてきた課題共有 (夏休み宿題サロンを通じた地域内連携) (小地域ネットワーク間の相乗効果)	-	10地区 (12自治会)	10地区 (12自治会) 2地区	11地区 (13自治会) 5地区

(評価指数) モデル地区の選定による新しい 活動の普及

(取組で見えてきた課題)

- ・宿題サロンの開催が小地域ネットワークのある地区での開催となり、住民から全ての地区で開催してほしいとの声があった。

#### 事例

○小地域ネットワーク連絡会による相乗効果

A 地区の小地域ネットワークの世話人さんが、認知症予防教室を別の地区でも開催されている。代表者連絡会での近況報告会や情報交換の場で「こんなことをしている、こんなことができる人を知っている」という話から、B 地区の小地域ネットワークで利用者向けに認知症予防教室を開催することになり、現在 5 カ所で好評を得ている。

## 活動目標 (2) 支え合い活動の充実

○身近な地域で住民の気づきから福祉課題に対する取り組みに結びつく地域の実情や特性に合った活動づくりを支援します。

○住民の気にかかけあう関係が災害時にも発揮できるよう平時から災害に関係する取り組みを行います。

2 次計画による成果

- ・身近に寄り合える多様な居場所が増えてきている。
- ・独居の認知症高齢者の生活を地域で支える取り組みにつながっている。(見守り)
- ・生活支援などの支え合い活動が地域で広がってきている。(米山台、葛城台、緑ヶ丘、片岡台 3)
- ・子ども食堂を通じて世代間交流やボランティアの協働が進んでいる。
- ・災害時にも対応できるよう子ども向けの災害訓練が継続して行われている。
- ・社協の災害時対応訓練が小地域ネットワークやボランティア、自治会の協働の場になっている。

### «実施計画»

#### ① 地域にあった活動づくり

	27年度	28年度	29年度	30年度
i. サロン等の居場所づくり (小地域ネットワーク) (その他のボランティア等)	11カ所 8カ所	12カ所 8カ所	13カ所 11カ所	14カ所 11カ所
★ ii. 見守り・助け合いの活動づくり	—	→	1カ所	1カ所

(評価指数) -

(取組で見えてきた課題)

- ・サロン会場への移動問題の解消。
- ・デイサービスなどサービス利用により地域との関係が希薄化していかない関係のあり方。
- ・活動での気づきを振り返る場の設定。

#### 事例

○身近に寄り合える場の発見

小地域ネットワークに協力している A さんは自宅前で漬け物を提供しながら寄り合いの場所になっている。このように地域の多様な居場所が自然発生しているのを注目してサポートしていくことが大切になってきている。

## ○身体・認知の衰えがあってもサロンに参加できる

A 地区では利用者が誘い合ってサロン会場まで歩いていく。コースを分担して身体が不自由な人も助け合っている。B 地区では認知症でサロンの開催日を覚えられない利用者には世話人が自宅までお迎えに行ってお誘いしている。また、C 地区のサロンでは人と関わるのが苦手な引きこもり傾向の中高年男性にもコーヒーの接待など、特技を生かした役割が用意されている。

このように身体や認知などに衰えがあっても参加できる環境が整備されている。

## ②災害にも強いまちづくり

	27年度	28年度	29年度	30年度
i. 災害時対応訓練の実施 (住民との協働による訓練の実施) (職員研修の実施) (行政訓練に参加)	実施	→	- 実施 参加	実施 参加

(評価指標) 災害時対応訓練開催：年1回

(取組で見えてきた課題)

- ・訓練だけでなく福祉教育など平常業務との関わりも大切。
- ・業務継続計画の策定など通常業務の運営に向けた取組も必要。
- ・災害対策本部など行政との連携についても検討が必要。

## 基本目標 1 の強化に向けたポイント

## ○専門職と地域との協働

A 地区で乳幼児サロンを開催していたが参加者が得られずサロンを休止になった。一方で保健師の情報からも、地域で関係を結べない家庭はあるとのことなので、その母親が地域で気軽に出向ける場がある方が良い。単純に周知がされていなく宣伝が必要なかもしれないが、自分から外(地域)に出にくい母親へのアプローチも考えていく必要があるのではと考える。

## ○専門職と住民との協働

B 地区で認知症高齢者の見守り活動に取り組んでおり、地域サロンへの参加も出来ている。昔ながらの地域で住民同士の関係性も構築できているが、地域で支援が必要な方への協力と負担感とのバランスが難しいと感じる。近所でも声をかけたり気にかけてもらえる環境は整っているが、「何かしてあげたい」という思いだけでなく「本人に何かあったらいけない」という不安も強く、事故の責任等に負担を感じている。

住民だけでなくフォローしていることをとおして信頼関係を築く必要がある。

## ○地域内での連携

小地域ネットワークの活動が自治会や子ども会と連携し地域ぐるみで交流会などを開催していく難しさを感じられた。近年子どもが学校以外でのクラブ活動や習い事が生活の主を占めており地域の行事に参加できていない現状があり、子ども会などを運営している母親と小地域ネットワーク世話人の世代間の違いなどもあり協働して企画することの難しさがある。

## 基本目標 2 誰もが地域に参加できる仕組みづくり

### 活動目標 (1) 多様な参加の機会づくり

- 就労継続支援事業「ぷらっと」を拠点として地域における障害者への理解を促進します。
- 多様な人が地域で役割を持ってまちづくりに参画するため、地域と関わりを持つ機会づくりを進めます。
- 悩みを持つ人が地域の中で孤立することのないよう、仲間づくりと居場所づくりを進めます。

#### 2次計画による成果

- ・若い母親たちが自分たち自身で必要とする居場所を作り始めている。(英語教室、母親の会、子ども食堂)
- ・地域で孤立していた子どもたちが安心して過ごせる居場所ができ、その居場所の意義や必要性が住民に理解されるようになってきている。(きらっと)
- ・地域での販売活動を行うことによってぷらっと利用者の働きぶりや活動を知ってもらうことができている。
- ・販売活動をきっかけに地域からの声でぷらっと利用に繋がった方がいる。その後、生活の幅が広がったり働くことや自分の力で給料を得ることの喜びを感じられ充実した暮らしを送られている。
- ・ぷらっとがボランティア活動の場になり活動を通じての障害理解の促進ができている。
- ・ぷらっとが地域の障害者の居場所になっている。
- ・身体障害者福祉協会や手をつなぐ育成会と一緒に研修を行ったり障害種別を横断した交流につながっている。

#### 「実施計画」

##### ①多様な人のつどえる場づくり

	27年度	28年度	29年度	30年度
★ i. 当事者の社会参加を通じた理解の促進 (配食サービスの試験実施) (町内での販売活動)	— 商業施設での販売活動	実施 →	→ 地域の青空市場に参加	→ 入浴施設での販売
ii. 同じ悩みを持つ人の仲間づくり (地域子育てサロン) (母親の会) (子ども食堂) (ぷらっとを起点とした当事者の交流) (障害種別を横断した交流) (おれんぢカフェ)	1カ所 — 1カ所 開催 — —	→ — → → — —	→ — 2カ所 → → → 受託	0カ所 1カ所 → → → →
iii. 子どもの居場所づくり (居場所づくり) (宿題サロン) (支援調整会議) (放課後の居場所)	未実施	週1回 10カ所 行政	→ 10カ所 小学校 1カ所	→ 11カ所 小中学校 →

(評価指数) ・「ぷらっと」による配食サービスの試験実施(新規)

・地域子育てサロン開催：(H28)1カ所⇒(H32)2カ所

#### (取組で見えてきた課題)

- ・子育て中の母親の仲間づくりは、ただ集える場ではなくテーマを絞った小規模な自主サークルへとニーズが変化してきている。
- ・子どもの居場所づくり事業については、小学生だけでなく卒業後も継続して伴走できる支援が求められている。
- ・利用者の増加に伴って学習支援ボランティアを大学生だけでなく地域のシニア層などにも拡大していくことが必要。

## 事例

## ○身近な地域での活動が障害者の社会参加へ

知的障害を持つAさんは以前は通所施設に通っていたがここ数年はどこにも行かず日中は自宅の近辺で時間を潰していた。気さくで誰にでも声をかける性格で頼まれて地域の行事のお手伝いをする事もあったが小さな子どもに声をかけたりするのをあまりよく思わない人もいた。Aさんの周囲の人は以前から仕事や施設利用などをすすめていたがAさんは働きたくないと思っていた。

あるとき、Aさんの住むB地区でぷらっとが出張販売をすることになり、同じ障害を持つ人が販売活動をしているのを見てAさんが話しかけてきたり、お手伝いをしてくれるようになった。そんな出張販売でのお手伝いを繰り返すなかで、Aさんも外に出て仕事をしたいとの意欲が出てきて少しずつぷらっとへの通所を始めた。出張販売のお手伝いから始まったAさんのお仕事も徐々に増え、今では週4日ぷらっとで働いている。

Aさんは今でもB地区の出張販売を手伝ってくれているが以前から気にかけてくれていた住民にも働く姿を見てもらえてAさんへの評価もよくなっている。

## ○気軽に立ち寄れて話せる場へ

障害者雇用で働くAさんや他事業所で働いているBさんが仕事終わりや休日にぷらっとに立ち寄り、ぷらっとで働く利用者さんと会話を楽しむなど、ぷらっとが障害当事者にとって家と職場の往復だけでなく、気軽に立ち寄って話せる場所になってきている。土日にはお互い連絡を取り合ってカラオケや互いの家を行き来するなど交友関係を広げる場としても機能している。

## ○多くの人の寄り添いで成長に

自身の感情をコントロールすることが苦手なAくんは、すぐに「死ね、殺すぞ」などの暴言や手を出してしまうことから、お友達の保護者からも「あの子に関わったらあかん！」と無視されていた。万引きなどの非行行為もあり、学校からの相談で、きらっとを利用し始めた。平日は学校や福祉サービス、土曜日はきらっととAくんによくの人が関わり始めた。そのことでAくんの様子も徐々に変化が現れ、子ども同士の諍いがあってもすぐに手を出したりしなくなり、非があるときはごめんなさいと謝れるようになってきた。

ある日、子ども同士の喧嘩に遭遇した地域の方がいつもなら一番に手が出てしまうAくんが顔を赤くして我慢している姿を目撃し、「Aくん、怒りを我慢できてるやん！」と見直されるようになった。

多くの人の寄り添いがAくんの成長につながっている。

また、Aくんのケースがきっかけで学校との支援調整会議の開催や他の子どものきらっと利用につながっている。

## 活動目標（２）学びの機会提供

- 学童期を対象とした福祉教育プログラムを提供することで福祉やボランティア活動への親しみを持てる機会を作ります。
- 住民が福祉活動に関心を持ち活動へと結びつくきっかけとなるよう学びの機会の提供や情報発信の充実を図ります。

### 2次計画による成果

- ・社協まつりに様々な年代の参加が得られている。特に幼児や小学生、中学生など若い世代の参加があり福祉への関心へとつながっている。また社会福祉法人等協力団体も増えた。
- ・地域での福祉活動のきっかけとなるような社協まつりとして、実行委員会で主体的な企画運営ができています。
- ・タウンカレッジの開催をとおして、地域でこれまで福祉と関わりのなかった住民との関係ができた。
- ・新たなボランティアグループが発足した。（タウンカレッジのひとつの講座から設立し町V連に所属）

### 「実施計画」

#### ①学童期を対象とした福祉教育

	27年度	28年度	29年度	30年度
i. 福祉教育プログラムの提供（学童対象）	—	→	→	実施

（評価指標）—

（取組で見えてきた課題）

- ・平成31年度は宿題サロンの延長として実施を予定している。

#### ②活動のきっかけへと結びつく学習会

	27年度	28年度	29年度	30年度
★ i. かんまきタウンカレッジの開催	—	月1回開催	→	→
ii. ボランティア講座の開催	手話講座の受託実施	→	→	→
iii. 社協まつりの開催	実施	→	→	→

（評価指標）・かんまきタウンカレッジの開催：月1回（新規）  
・ふれあい社協まつり開催：年1回

（取組で見えてきた課題）

- ・タウンカレッジで新たな関わりや参加者が得られており、熱心に1年間参加してくれる人も多い。参加者とともにタウンカレッジから卒業して集える場づくりをしていくことが必要。
- ・社協まつりの参加者は増加し、啓発の機会としては一定の成果があるので活動に結びつくようなしかけが必要。

### 事例

#### ○タウンカレッジで関係づくり

タウンカレッジの参加者のうち20名程度は1年をとおして参加していて、顔なじみになりタウンカレッジの機会にお話しするのを楽しみにされている。サロンのような交流の機会となっている。また、タウンカレッジから新たなボランティアグループも発足している。（TCカメラを楽しもう会）

## 活動目標（3）地域活動者への支援

- ボランティア活動に関心のある人が活動に参加できるよう支援します。
- 活動者の悩みや気づきに寄り添い、より活動を深められるような支援をします。
- 福祉ボランティアに限らず、広くボランティア活動者がつながれるような機会を提供します。

### 2次計画による成果

- ・ホームページなどから活動を知り、活動相談に結びついている。
- ・立ち上げに関わる相談に結びついてきている。
- ・個人ボランティア活動者が増え、地域の定期的な活動へとつながった。

### 「実施計画」

#### ① ボランティア活動支援の強化

	27年度	28年度	29年度	30年度
i. ボランティアコーディネート機能の強化	—	情報掲示板の設置	→	→
ii. スキルアップ講座の開催	—	未実施		
iii. 「ちょボラ」等の情報発信の充実 (編集委員会による紙面づくり)	年3回発行	→	・カラー化 組織化	→ →

(評価指標) スキルアップ講座の開催：年1回

#### (取組で見てきた課題)

- ・ボランティアに関わる総合相談の窓口であることを周知していく必要がある。
- ・ボランティア活動をより深めるための支援（スキルアップ講座等）が求められている。

#### ② 活動者の横のつながり支援

	27年度	28年度	29年度	30年度
i. 上牧町ボランティア連絡協議会への支援	定例会への参加	→ 助成配分委員の組織化	→ →	→ →
★ ii. 町内ボランティアのネットワーク化	—	情報掲示板の設置 タウンカレッジでの交流会	→ →	→ →

(評価指数) ボランティア交流会の開催

#### (取組で見てきた課題)

- ・町ボランティア連絡協議会が加入団体にとって参加しやすい運営が求められている。
- ・ボランティア活動者が集い、交流できる場を定期的で開催していきたい。
- ・ボランティア団体がコラボできる機会が必要。

### 基本目標2の強化に向けたポイント

#### ○活動したいに寄り添える体制づくり

地域子育てサロンへのニーズの減少にもあるように集いの場にたいするニーズはより多様化していて、小規模な自主サークルやイベントが開催されるようになってきている。社協としてもいくつかのサークルやイベントの支援を行っているが、普段から何らかの関わりのある人への支援にとどまっている。

情報発信の強化も含めてより多くの「活動したい」を支えられる体制づくりが求められている。



## 基本目標 3 暮らしの課題を受けとめる相談体制の強化

### 活動目標 (1) ニーズ把握の充実

- 小地域ネットワーク等の身近な地域での活動と連携することで暮らしの困りごとをいち早く発見します。
- 社協の総合相談機能を強化することで発見した暮らしの困りごとを漏らさず受けとめます。

#### 2次計画による成果

- ・小地域ネットワークで地域限定のサロンを開催する事により、住民同士が気に掛け合う関係になってきており、暮らしの困りごとに耳を傾ける状況になってきている。
- ・行政や学校などで生活福祉資金制度の理解が深められていて相談が増加している。
- ・地域の取り組みを発見できるようになった。
- ・関係機関との協議や社協内でのサービス調整会議などを通じて複合的な課題に対しても支援を行えるようになってきた。

### 《実施計画》

#### ① 地域を基盤としたニーズ発見の仕組みづくり

	27年度	28年度	29年度	30年度
★ i. 小地域ネットワーク等と連携したニーズキャッチ (担当地区制の導入) (ネットワーク世話人会への参加) (生活支援コーディネーターの受託)	—	導入 全ての世話人会へ参加	→ → 受託	→ → →

- (評価指標) ・サロン等での福祉ニーズの発見  
・生活支援コーディネーターの受託

#### (取組で見えてきた課題)

- ・小地域ネットワーク等より身近な場所でニーズ発見が出来るように成功事例等の情報共有。

#### ② 課題を漏らさず受けとめる体制づくり

	27年度	28年度	29年度	30年度
i. 総合相談機能の強化	—	アウトリーチの徹底	→ 民協、学校との連携	→ →
ii. サービス調整会議の開催による社協内連携	月1回開催	検討ケースの拡大	→	→

- (評価指数) サービス調整会議の拡大

#### (取組で見えてきた課題)

- ・施設など関係機関からの相談は増えてはいるが関係機関以外にも社協が地域で困りごとを抱えている人への相談窓口であることを周知することが必要。
- ・より多くの機関との情報共有やケース会議の開催などの連携の推進。

#### 事例

- サービス調整会議から多様な支援に

社協内でのサービス調整会議で、必要にもかかわらず福祉サービスの利用を減らしていく家族のケースが取り上げられた。同居する50代の長男が仕事に就いていないことやこれまで貯蓄を取り崩して生活してきたことが明らかになり、福祉サービスの利用削減は経済状況悪化の可能性があるので、経済的な安定に向けての支援の可能性を探ることとなった。

長男に対して県生活自立サポートセンターと協働で就職に向けての支援や当面の生活保護受給への支援を行いつつ、地域との関わりの薄い世帯だったので地域のふれあいサロンへ参加するように促し、小地域ネットワークにも家族の情報提供を行った。生活保護の受給が始まり経済的な

安定が得られたことで認知症の母親のデイサービス利用が再開、福祉サービス利用が減少していく過程で母親に対する介護ストレスが増していた長男の様子が落ち着き始め懸念していた介護虐待を未然に防ぐことが出来た。

また、長男には余裕が出来た時間で就職活動を行うかたわら、地域のふれあいサロンのお手伝いを始め、引きこもりがちだった生活から定期的に外出するようになった。人と関わるのが苦手だったが「男は仕事をしなければ」とサロンの代表者から仕事を紹介され週に数回仕事を始めることが出来た。現在も継続して仕事やサロンのお手伝いが出来ている他、得意のパソコンでサロンで知り合った高齢者の自宅に出向き自叙伝の作成を手伝いなど地域での役割を持って生活できるようになった。

#### ○地域のほっとけないから

A 地区の小地域ネットワークの世話人が小さな子どもが夕方遅くまで外で遊んでいるのを心配してその子どもたちに声をかけた。子どもたちは世話人に母親が家に帰ってこない日もあることや父親も夜の仕事をしているので自分たちだけで遊んでいる話した。このことがきっかけでその世話人が自宅を開放し、放課後の学習や遊びのために自由に立ち寄れる居場所を提供し始めた。

居場所の提供が始まってしばらくした頃、その世話人から学習面や家庭環境で課題を抱えている子がいると社協に連絡があり、職員が放課後に世話人宅を訪問。子どもたちと話す中で高校受験に向けて学習をしたいとのニーズを受けとめ、子どもの居場所づくり事業への参加へとつながった。